

ラオス・ルアンパバーンにおける社会的記憶と景観

Social Memory and Landscape in Luang Prabang, Lao PDR

須永和博* [立教大学観光学部・兼任講師]

SUNAGA, Kazuhiro

*獨協大学外国語学部・准教授

Summary: UNESCO has been a crucial institution which selects and authenticates a site as an extraordinary heritage endowed with 'outstanding universal value'. In other words, a World Heritage status is a strong marker for 'site sacralization' (cf. MacCannell, 1999), which encourages the creation of national identity as well as mobilities of various actors, such as tourists, researchers, entrepreneurs, and international organizations. Therefore, heritage should be understood as a contested space, which is negotiated and transformed not only by local and national agents but also by global actors in the arena of cultural politics.

This paper aims to examine how the landscape and social memory of Luang Prabang, a World Heritage site in Lao PDR, has been transformed and reinterpreted in the context of postcolonial condition. It is argued that colonial nostalgia is a strong 'marker' to redefine the landscape of Luang Prabang, by shedding light on the hegemonic influences of French as well as Lao returnees from the western countries in the post-socialist era.

Key words: 記憶 (memory), 景観 (landscape), 世界遺産 (World Heritage), ルアンパバーン (Luang Prabang)

I はじめに

1. 社会的記憶とツーリズム
2. 「景観」という視点

II ルアンパバーンの概要

III 世界遺産化と二次的景観(空間)の生産

1. 第1段階——世界遺産登録申請の準備
2. 第2段階——遺産保全計画策定・施行

IV 都市景観の変容

1. コロニアル・ノスタルジア

2. 博物館化と無形文化遺産の衰退

V 結び

I——はじめに

本論文は、ラオス・ルアンパバーンを事例に、

世界遺産化によって生じる人や資本、イデオロギーなど多種多様なモビリティと、そのなかで生起する都市景観の生産・変容の諸相について明らかにすることを目的としている。

観光消費の記号的側面に着目したD. マッキヤーネルは、観光地化のメカニズムを「指標(marker)」の付与という点から考察を試みた。指標とは、ある光景(sight)に付与された意味や価値などの情報のことであり、この「指標」の存在こそが、「この場所は必見である」といったような観光客の集合的感覚を生み出すという。こうした指標付与のプロセスのことを、マッキヤーネルは「サイトの聖化(sight sacralization)」と呼んでいる(MacCannell, 1999: 42)。

マッキヤーネル自身は必ずしも言及していないが、観光客のモビリティを生み出す「サイトの聖化」を考える上で、今日ユネスコの世界遺産は極めて影響力のある制度といえる。世界遺産という制度は、世界の様々な遺産を価値づけ、序列化し、「真正性」を付与する強力な装置となっているからである(中田 2008: 100-102, 吉田, 2013: 185-186)。たとえば世界遺産に登録された途端に、観光客数が急増するのは、世界遺産に含まれる「顕著な価値」という「指標」がもたらす「聖化」の作用といえる。

さらに世界遺産化という「サイトの聖化」は、「人類共通の遺産」という普遍主義的な価値づけがなされることで、もともとはローカルな文化遺産に過ぎなかったものを、ナショナルなものへ、さらには人類全体の遺産へと段階的に格上げしていく機能をもつ(Kirshenblatt-Gimblett, 2006)。こうして「格上げ」された文化遺産の保全や利用をめぐることは、観光者のみならず、中央政府や国際機関、NGO、資本家など様々なアクターのモビリティを生み、地域住民を巻き込んだ「文化政治のアリーナ」(King, 2016: 2)が形成されていく。

本論文は、以上のような世界遺産という「指標」

の社会的・文化的諸作用に着目した上で、世界遺産登録をきっかけに生じる都市景観の生産・変容プロセスについて、ラオス・ルアンパバーンの民族誌的事例をもとに考察することを目的としている。そして、具体的な事例の考察に際しては、(1)社会学を中心に蓄積されてきた「記憶」をめぐる一連の研究(浜, 2007, 米山, 2005), (2)景観人類学の中で提起されてきた「景観」概念(河合 2013)を理論的な補助線として用いる。そこでまず、本論文の理論的枠組みとなる「記憶」と「景観」について若干の整理を行なっておきたい。

1. 社会的記憶とツーリズム

過去の出来事を想起する「記憶」という現象をめぐって、社会学や人類学においては、それがいかにか社会的に(集合的に)形成されるのかという点に着目しながら、具体的な「記憶の場」(ノラ, 2002)とそこに関わる諸アクター間の相互作用を明らかにしてきた(浜, 2007, 米山, 2005)。たとえば米山リサは、原爆ドームに象徴される戦後の広島における記憶の場が、戦前・戦中の帝国主義的行為の記憶を不可視化し、結果として「唯一の被爆国日本」というナショナルな記憶を生み出す場になってきた点を指摘している。米山によれば、広島の記憶は「戦前の大日本帝国、その植民地主義的行為、そしてそれらの帰結の深刻な曖昧化の上に成立している」という(米山, 2007: 4)。

また同様に、熱帯アフリカ最古のヨーロッパ式建造物であるガーナのエルミナ城の観光化について論じたE. ブルーナーは、500年の長きに渡る多様な歴史に関心を寄せるガーナ人に対し、アフリカ系米国人を中心とする外国人観光客は、奴隷貿易の拠点として使用された18世紀後半の出来事を想起するという点を指摘している(ブルーナー, 2007: 153-188)。15世紀後半にポルトガル人によって建てられたエルミナ城は、オランダ、イギリス、独立後のガーナとその支配権や用途は時代

とともに変化してきた。それゆえ、城の修復に際してはどの区画をどの時代のものとして提示するのかをめぐって解釈のせめぎ合いが生じるのだが、自らのルーツを確認するために訪れるアフリカ系アメリカ人が増えるなかで、奴隷制の最盛期であるイギリス統治時代の歴史に重きが置かれるようになってきているのである。そして、想起される過去が歴史上の特定の時期に収斂していく傾向は、エルミナ城の保全が米国もしくは米国が資金援助する機関が中心となって行われることによって、ますます強化されていく (ibid.)。

以上、2つの民族誌的事例から浮かび上がる論点の1つは、社会的記憶を生み出す「記憶の場」においては、特定の記憶が想起される一方で、それ以外の記憶が忘却されていく、すなわち「想起」という形式をとった忘却¹(米山, 2005: 228)が伴うという点である。

さらに、特定の社会的記憶が「支配的な物語」(meta narrative)になると、その記憶の場を取り巻く景観自体も徐々に変化していく。たとえば、エルミナ城については、前述した通り、アフリカ系米国人が想起する時代の記憶が特権的に扱われ、遺産の修復や公開自体がその時代を強調するような形で進められている。同様のことは広島においても見られる。米山によれば、市内にある軍国主義的・帝国主義的シンボルは戦後の都市政策や観光政策のなかで不可視化され、「記憶景観の馴致」が行われてきた(米山, 2007)。こうしてツーリズムと結びついた「記憶景観」の再編によって、特定の社会的記憶が再生産されていくのである。

以上のような論点を踏まえれば、社会的記憶について考察する際には、H. ルフェーブルが言う意味での「空間の生産」(ルフェーブル, 2000)や「景観」(河合, 2013)といった視座は不可欠なものといえよう。そこで次に、本論文のもう1つの理論的枠組みとなる「景観」という用語について整理しておきたい。

2. 「景観」という視点

本論文で着目する「景観」とは、景観人類学 (anthropology of landscape) と称される学問的潮流のなかで醸成されてきた概念である。日本において景観人類学を牽引してきた河合洋尚の整理によれば、「景観」とは各々の主観的なまなざしから立ち現れてくる(自然・建造)環境のことである(河合, 2013: 25)。我々が環境を眺める際には、マスメディア等の影響を受け、主観的な色眼鏡を通してその環境を解釈する。景観人類学においては、このような社会的・文化的に構築された色眼鏡を通じて立ち現れる環境のことを「景観」と定義している (ibid.: 25)。ここでいう「色眼鏡」とは、観光研究の文脈に即していえば、マッキヤーネルのいう「指標」、あるいはアーリのいう「まなざし」とほぼ同義であろう。

景観人類学において特徴的なのは、以下で述べるように「景観」を2種類に分けて考察しようとしている点である (ibid.: 26-27)。すなわち、諸集団が生活実践のなかで培ってきた環境への個別的ななかわりとしての「一次的景観(場所)」と、都市開発や観光開発など、政治経済的な力学の中で、イデオロギー的な意味が付与されることで立ち現れてくる「二次的景観(空間)」である。前者が個別具体的に重層的であるのに対し、後者は施政者や企業家、学術といった権威や権力と関わる事象であるがゆえに、固定的・均質的である。この2種類の景観という観点から考えれば、観光研究のなかで議論されてきた「指標」や「まなざし」とは、二次的景観を生み出す媒介といえる。

なお、景観人類学における「場所」と「空間」というタイポロジーは、言うまでもなくY. トゥアンやE. レルフに代表される現象学的地理学の諸議論を踏襲している。ただし、かつての現象学的地理学の議論では、「空間」を価値中立的なものとして捉え、「場所」の分析に重点をおいたのに対し、

景観人類学では「空間」を価値付与的な概念として捉え直し、そこに含まれるイデオロギー的側面を主題化している点に特徴がある(河合, 2013:31-32).

景観人類学の1つの課題は、こうした2種類の「景観」をめぐる競合関係を具体的な民族誌的事例に即して明らかにすることである。先ほどの社会的記憶をめぐる議論を踏まえれば、「一次的景観」と「二次的景観」のせめぎ合いは、時に社会的記憶をめぐる抗争の場(contested space)、言い換えれば「記憶景観」(米山, 2007)をめぐるポリティクスが生起する場ともなる。後述するように、ルアンパバーンでは世界遺産登録とそれに伴う遺産保全活動が、二次的景観を生産する強力な装置となってきた。そこで本論文では、世界遺産登録をきっかけに生まれる二次的景観の生産が、いかなる都市景観の変容をもたらしているのか、そのポリティクスの諸相を明らかにしたい。

II——ルアンパバーンの概要

ラオス北部のメコン川沿いに位置するルアンパバーンは、14世紀にファーグム王(在位1353年～1373年)によって樹立されたランサーン王国の都であった。1563年には、ビルマ軍の襲撃から逃れるために、当時のセーターティラート王がヴィエンチャンに遷都するが、18世紀初頭にランサーン王国が、ヴィエンチャン王国(中部)、チャンパサーク王国(南部)、ルアンパバーン王国(北部)の3つに分裂すると、ルアンパバーンは再び王都となった(Atelier de la Péninsule, 2004: 13).

もともとルアンパバーンは、「シェンドーンシェントーン」と呼ばれていたが、セーターティラート王が遷都の際、カンボジアから持ち帰ったとされるパバーン仏を同地に残したことから、「ルアンパバーン(パバーン仏の都)」と改称された。それ以降、今日ルアンパバーンを代表する寺院の

1つとなっているシェントーン寺院が建てられるなど、上座部仏教が急速に普及していくことになった。こうして仏教文化が根付いたルアンパバーンは、19世紀後半から始まるフランスによる植民地化後も王都として存続し続けた(山田, 2018: 47).

現在のルアンパバーンの都市景観を考える上で無視できないのが、フランス植民地主義(1893年～1954年)がもたらした影響である。特に1909年から1925年にかけて、フランスはルアンパバーンにおいて大規模な都市開発を実施した(Atelier de la Péninsule, 2004: 36)。その結果、煉瓦やモルタル、漆喰(*torchis*)といった新しい建築資材が導入され、フレンチ・コロニアル建築やフランスの文化的影響を取り入れたラオ建築など、複数の文化が融合した「インドシナ様式」と呼ばれる独自の建築様式を生むこととなった(Heywood, 2006: 170-171)。そして、フランス主導の都市開発が進むことで、植民地主義的開発が先行していたベトナムから多くの華人が移住し、彼らの店舗兼住宅として長屋形式のショップハウスも多数立ち並ぶようになる(ibid.)。こうして仏教寺院やラオ建築、フレンチ・コロニアル建築、華南地域の建築的特徴を反映したショップハウスなどが織りなす独特の建造環境(built environment)が形成されていった。

しかしながら、第二次大戦後、フランスからの独立をめぐる王国政府と革命勢力パテート・ラオによる内戦が起り、ベトナム戦争を背景とした米国の介入などにより、泥沼化していく。この内戦によってラオスに落とされた爆弾は200万トンを超えており、住民1人当たりで換算すると、ラオスは世界で最も多くの爆弾が落とされた国となる。その結果、ラオスでは75万人以上もの人々が住んでいた土地を離れ、「国内難民」になったと言われている(山田, 2018:106)。この甚大な被害をもたらした内戦が終結するのは、1975年のこ

とである。ベトナムやカンボジアなど周辺諸国での革命勢力の勝利を受けて、ラオスにおいてもパテート・ラオがラオス人民民主共和国を樹立し、王政を廃止したのである。その結果、王国政府寄りだったラオス人のなかには、米国やフランス、オーストラリアなどに亡命した人も多く、その数はおよそ40万人に達したと言われている(Souvannavong, 2000: 100)。ルアンパバーンの中心部は、戦禍は逃れたものの、一部住民の国外への移住や社会主義政権による市場経済の制限などにより、王都としての賑やかさは失われていったようだ。

ルアンパバーンが再び活気づくのは、1986年に導入された経済政策「チンタナーカン・マイ(新しい考え)」が軌道に乗る1990年代以降のことである。この市場経済の導入を盛り込んだ新たな経済政策によって、これまで制限されていた国際観光の受け入れを再開した。そして、1995年にUNESCOの世界文化遺産に登録されると、ルアンパバーンを訪れる観光客は急増し、近年ではイギリスの旅行雑誌『ワンダーラスト』などで毎年高い評価を受ける、東南アジア有数の観光都市となっている。

Ⅲ——世界遺産化と二次的景観(空間)の生産

本章では、ルアンパバーンの世界文化遺産への登録プロセスとその後の変化を、二次的景観(空間)の生産という視点から整理をしたい。世界遺産化に伴うルアンパバーンの二次的景観の生産には、以下に述べるように2つの段階がある。まず第1段階(1987～1995年)は、世界遺産登録申請のための様々な準備作業が行なわれた時期である。この準備作業を通じて、ルアンパバーンの建築的特徴が同定され、遺産としての指標が明示化された。そして、世界遺産登録後の遺産保全計画の策定・施行(1996年)以降が第2段階である。この時

期になると、明示化された指標に沿って実際の都市景観自体が再編されていくようになる。こうして世界遺産登録をきっかけに、特定の指標が付与された二次的景観が再生産されていくようになるのである、以下では、それぞれの段階についても少し詳しい説明をしていきたい。

1. 第1段階——世界遺産登録申請の準備

チンタナーカン・マイが導入された翌年、ラオスは世界遺産条約に批准する。これ以後、ラオスは国際機関や先進諸国の協力のもと、遺産保全の枠組みを整備するとともに、世界遺産登録へ向けた準備を始めていく。この時期急速に高まる文化遺産への注目は、外貨獲得の手段としての観光客の誘致といった経済的側面もさることながら、冷戦終結に伴うナショナリズムの模索といった政治的背景も多分に影響している。

ラオスを含む東南アジアでは、冷戦構造の終結によって、政治体制やイデオロギーに替わるナショナル・アイデンティティの模索が求められるなか、1990年代以降、国民統合のための様々な文化政策が行われるようになる(田村, 1998)。ラオスの世界遺産登録へ向けた諸々の取り組みも、こうした文脈で捉えることが可能である。すなわち、ポスト冷戦という政治的変化のなかで、ナショナル・アイデンティティを生み出すための資源として、遺産の再発見・再評価がなされるようになったのである。

ラオスでは、1994年にラオス情報文化省が在ヴィエンチャンのフランス人建築家が代表を務める「アトリエ・ペニンシュラ」(Les Ateliers de la Péninsule)に委託して、ルアンパバーンの世界遺産登録へ向けた遺産の調査と申請書類の作成に取り掛かる。この査定調査でリストアップされた33の寺院と111の世俗的建造物が国家遺産(national heritage)として登録され、申請の際の基礎的資料となった(UNESCO 2004: 40)。

世界遺産登録の申請に際してアトリエ・ペニンシュラが行なった事前調査は、ルアンパバーンの二次的景観を生み出す最初の契機になったものといえる。なぜなら、ルアンパバーン市内にある建造物のうち、何を保存すべきか・しないかの判断基準を作り出し、「ルアンパバーンらしさとは何か」の再定義がなされていったからである。たとえば、この調査を通じて、ルアンパバーンの(仏教寺院以外の)建築的特徴が、以下のように類型化された(Les Ateliers de la Péninsule, 2004: 49-100)。

- ① 木造家屋²
- ② 煉瓦と木造を組み合わせた家屋³
- ③ ハーフティンバー様式の家屋⁴
- ④ レンガとハーフティンバーを組み合わせた家屋⁵
- ⑤ コロニアルな公共建築⁶
- ⑥ ラオ・コロニアル家屋⁷
- ⑦ ショップハウス⁸

以上のように、世界遺産登録申請のための準備作業を通じて、7つの建築様式⁹がルアンパバーンの景観上の特徴として学術的なお墨付き与えられ、「真正化された(authenticated)」のである。これが、ルアンパバーンにおいて二次的景観が生産されていく最初の段階となった。

2. 第2段階——遺産保全計画策定・施行

第2段階は、世界遺産登録後に遺産保全計画が策定・施行されるなかで展開していった。ルアンパバーンでは、世界遺産登録の翌年、フランス政府やEU、UNESCOなどの支援を受けて「遺産の家(La Maison du Patrimoine)」という組織が作られた。この組織は、ルアンパバーンの遺産保全が世界遺産の基準に沿って実行されるよう、コミュニティや遺産の持ち主に助言を与える役割を担っ

ており、そのメンバーはラオス人の建築家と外国人専門家(その多くはフランス人)によって構成されている。後述する遺産保護地域では、新しい建物を建てたり、既存の建築を修繕する際には、「遺産の家」の助言を受けた上で、建設運輸郵便通信局の許可を得ることが必要とされている(Berliner, 2012: 722, UNESCO, 2004:43)。

ちなみに、「遺産の家」の活動は、フランス・シノン市と遺産保全のための協力をするなど、フランスの影響を強く受けながら展開していった。そして、この組織設立をきっかけに行われたルアンパバーンの遺産に関する追加調査を委託されたのも、前出のアトリエ・ペニンシュラであった。この追加調査の成果は、ルアンパバーン国立博物館(王宮博物館)やベトナム・ハノイなどでも展示・紹介され、ルアンパバーンの景観の特徴が内外に発信されていくことになった(Les Ateliers de la Péninsule, 2004)。

さらに「遺産の家」は、2001年にPSMV(*The Plan de Sauvegarde et Mise en Valeur*)と呼ばれる遺産保全の詳細なガイドラインを作成している。以下に述べるように、このガイドラインを通じて、①遺産保護地域の境界が画定され、②保護地区内の建造物の建設・補修等に関する詳細なルールが定められた。

① 遺産保護地域の境界画定

まずPSMVでは、ルアンパバーン市の中の約860haを「遺産保護地域」(ZPP: Heritage Protected Areas)に指定し、さらにそれを、以下の4つに区分した(Dearborn and Stallmayer 2010)。

- ZPP-Ua(The Preservation Zone) : 中核エリア
- ZPP-Ub(The Protection Zone): 郊外エリア
- ZPP-N(The Natural and Scenery Zone): 湿地や山などの自然環境エリア。

・ZPP-M(The Monasteries Zone): 寺院

この遺産保護地域全体の中には29の村と34の寺院が含まれ、そのうち「中核エリア」に当たるZPP-Uaには16の村が含まれている。以下では、特に断りのない限り、ルアンパバーン観光の中心的エリアとも重なるZPP-Uaの世俗的建造物に焦点を当てながら、議論を進めていきたい。

② 建造・補修に関するルールの策定

「遺産の家」設立に際して、アトリエ・ペニンシュラが行なった追加調査では、世界遺産登録申請時にリストアップした物件の他に、新たに保存すべき建造物が抽出され、世界遺産登録時のものと合わせ、合計443の世俗的建造物が保存建築として指定されることになった。PSMVでは、これらの保存建築について、「破壊や移動や変更は許されず、補修は元の建築的特徴に忠実でなければ

ならない」としている(La Maison du Patrimoine 2001:15)。また、それ以外の建造物についても、建替えの際にはPSMVが指定する建築タイプのいずれかに合致した建造物を建てなければならない(ibid.)。

以上のように、遺産保護地域内のすべての建造物の建設・補修について詳細なルールを定めているPSMVは、ルアンパバーンの遺産とは何かを(再)定義づけるのに決定的な役割を担ったといえる(Dearborn and Stallmyer 2009:253)。そしてルアンパバーンの都市景観は、世界遺産化に伴い急速な観光化が進むなか、PSMVに沿った固定的・均質的な二次的景観の再生産が加速化していくことになる。

IV——都市景観の変容

ルアンパバーンを訪れる観光客は、世界遺産登



地図1 保存建築の分布

出典 Heritage Information Center (n.d.)

録をきっかけに年々増加傾向にあり、2016年の入込観光客数は約61万人ほどである(Leong et al. 2017)。これは、最初に統計がとられた1997年と比べると、9倍近くの増加であり、ここ20年の間に急速に観光化が進んでいったことが窺える。こうした観光客の急増は、ホテルやゲストハウス、レストラン等の観光関連サービス業の増加を促し、宿泊施設に限って言えば、1997年時点では29軒であったのが、現在では400軒を超える状況になっている(Leong et al. 2016, 2017)。たとえばガイドブック『ロンリー・プラネット』の2010年度版には、「18日に1軒のペースで、ゲストハウス建設が進んでいる」(Bush, Mark and Ray 2010:259)という記述があるほどである。以下では、急速な観光化が進む中で、ルアンパバーンの都市景観にいかなる変化が生じているのか、その諸相を紹介したい。

1. コロニアル・ノスタルジア

観光化が進むルアンパバーンの都市景観の特徴として、ブティック・ホテルと呼ばれる業態の増加が挙げられる。ブティック・ホテルとは、主に1980年代の欧米において、チェーン展開する大型ホテルへの反動から生まれた新たな業態であり、その特徴としては、①小規模、②独特のデザイン、③パーソナル化されたサービス、④独立系(チェーン展開していない)などの点が挙げられる(Chang and Teo, 2009: 359)。たとえば、独自の歴史的景観の残る場所においては、ヴァナクチャーな建築をリノベーションすることで、立地する地域の文化的特徴や歴史性を体現したようなホテルも多い。

ルアンパバーンでも、世界遺産登録後から保存建築に指定された建造物をリノベーションしたブティック・ホテルが増え続けている。当初は、かつての王侯貴族やフランス人植民者が暮らしたコロニアル様式の建物をホテルに転用したものが多



写真1 ル・カラオの外観

かったが、近年では一般住宅や商店として利用されていたラオ建築やショップハウスをリノベーションしたものもある。

たとえば、メコン川沿いに立地するコロニアル建築(PSMV番号:283)を転用したル・カラオ(Le Calao)は、最初期に開業したブティック・ホテルの1つである(写真1)。もともこの建物は、1904年に華人の豪商によって建てられたフレンチ・コロニアル様式の邸宅であるが、その後フランス人の手に渡り1968年頃までは実際に住居として利用されていた。しかし、激化する内戦や社会主義化の影響を受け、世界遺産登録時には空き家となっていた。それを「遺産の家」設立に関わったフランス資本のアトリエ・ペニンシュラがリノベーションし、1996年にホテルとしてオープンしたのである。¹⁰

こうしたコロニアル様式の建物をリノベーションしたブティック・ホテルを通じて表象されているのは、「コロニアル・ノスタルジア」(Peleggi, 2005)とも呼びうるイメージである。M.ペレッジによれば、1990年代以降の東南アジアでは、シンガポールのラッフルズ・ホテルの改修が嚆矢となり、植民地時代に建設された建物が、観光の文脈で急速に商品化されるようになってきたという(Peleggi, 2005)。そのなかでは、植民地主義の政治性は消去され「古き良き時代」として理想化される傾向が強い。このような観光の文脈で商品化さ

れるコロニアル・イメージのことを、ペレッジは「コロニアル・ノスタルジア」と呼んでいる (Peleggi, 2005)。

この点で興味深いのは、ルアンパバーンの遺産保全に関わるアクターにフランス系が多いということである。それゆえ、D. バーリナーは、ルアンパバーンにおける遺産管理は、フランスによる新たな植民地主義的形態となってしまうと論じている (Berliner 2012:780)。実際、保存建築のリノベーションに関わる建築家の中にもフランス系が多く、フランス人のまなざしがルアンパバーンの二次的景観の生産に少なからず影響を及ぼしていると考えられる。すなわち、世界遺産化の過程で、かつての宗主国であったフランス人が抱く「コロニアル・ノスタルジア」がルアンパバーンの強力な「指標」となってきたのである。

W. ショウは、オーストラリア・シドニーにおいて、近年「遺産」として再発見されたヴィクトリア様式の古い集合住宅が残る地域が「白人による建国」という白人中心主義的な視点から語られることで、アボリジニや他の移民の視点を不可視化してきたことを明らかにしている (Shaw, 2005)。すなわち、シドニーにおける歴史的景観の遺産化は、白人による空間と歴史の領有という「新たな都市のコロニアリズム (new urban colonialism)」の現れでもある (Atkinson and Bridge, 2005)。ポストコロニアルな都市空間において、白人による遺産と歴史の流用が進んでいるというショウらの指摘は、フランスの文化的影響を強く受けながら遺産保全が進められるルアンパバーンの事例にも、ある程度は当てはまると思われる。

しかしながら、「白人性の特権 (privileging of whiteness)」 (Atkinson and Bridge 2005:2) を強調するだけでは、ルアンパバーンの状況理解としては不十分である。なぜなら、コロニアル・ノスタルジアを再生産するもう1つの主要なアクターとして、近年亡命先から帰還したラオ人の存在が挙げ

られるためである。前述したように、内戦の激化や革命勢力による政権樹立を背景に、1970年代に国外へ難民として移住したラオス人は40万人にも上る。しかし1990年代以降、ラオスが市場経済を部分的に導入していくなかで、かつてのラオス難民の中でも比較的富裕な層の人々が、ビジネスチャンスを求めて帰還するという機運が高まっている (Souvannavong, 1999)。こうした帰還ラオ人の中には、ラオ建築やフレンチ・コロニアル建築への関心が高いなど、特有のヘリテージ意識 (heritage consciousness) を持つ人も多く (Evans, 1998: 123, Long, 2003)、歴史的建造物をリノベーションしたブティック・ホテル事業に参入するケースも散見される。

たとえば、1904年に建てられたコロニアル建築 (PSMV 番号 : 425) をリノベーションしたサトリ・ハウス (Satri House) は、フランスからの帰還ラオ人が経営するブティック・ホテルである (写真2)。もともとこの建物は、王室出身でありながら革命勢力に参加したスパーヌウォン殿下が幼少期に過ごしていた邸宅である。内戦終結後もしばらくはスパーヌウォンの親族が所有していたが、2002年に現オーナーに売却され、コロニアル・イメージを強調したブティック・ホテルとなった。もともとデザイナーであったオーナーは、ラオスに帰還後ヴィエンチャン市内でシルク製品やジュエリー雑貨等を販売するブティックを運営してい



写真2 サトリ・ハウスの外観



写真3 サラー・パバーンの外観1



写真4 サラー・パバーンの外観2

たが、事業拡大のためホテル業にも参入したという。

もう1つ、帰還ラオ人がオーナーのブティック・ホテルを紹介しよう。オーストラリアで建築を学んだ帰還ラオ人によって運営されているサーラー・パバーン(Sala Prabang)である。かつて首相を務めた人物の邸宅でもあったコロニアル様式の保存建築2棟(PSMV番号: 316, 213)を建築家であるオーナー自らリノベーションし、2002年にブティック・ホテルとしてオープンした(写真3)。このメコン川に面した好立地の物件を皮切りに、周辺のラオ建築やショップハウスなどの保存建築を次々と買収・リノベーションし、2019年現在はそれぞれ特徴の異なる7棟の客室棟を有するホテルとなっている。サーラー・パバーンの宿泊棟は、コロニアル・イメージを強調したことから、民家に囲まれ周囲の生活景観に溶け込んだ

ラオ建築など、元々の建築的特徴を生かした様々なスタイルが混在している(写真4)。いずれも小規模な民家をリノベーションしているため、7棟合計の客室数は49室である¹²。そして、これらのホテルはすべて徒歩圏内にあり、どの宿泊棟のゲストも、朝食の際には、メコン川沿いのテラスに設置された1箇所のダイニングルームに集まる仕組みになっている。

以上、帰還ラオ人の経営による2つのブティック・ホテルを紹介してきたが、2つの事例に共通しているのは、オーナーが高度な文化資本を有する「クリエイティブ・クラス」(フロリダ, 2008)に属しているという点であろう。どちらも、デザイナーや建築家としての経験で培った特有の美意識を積極的にブティック・ホテルの運営に活用している。

シンガポールのショップハウスを転用したブティック・ホテルについて考察したT. C. チャンとP. テオは、ブティック・ホテルが、ホテル経営者(hotelier)によって具現化されたシンガポール人のアイデンティティのエンブレムになっていることを指摘している(Chang and Teo, 2009: 342)。そしてそれは、過去と現在のハイブリッドな組み合わせという点において、シンガポールのポストコロニアルな状況の表れでもあるという(Teo and Chang, 2008: 84)。

ルアンパバーンのブティック・ホテルもまた、こうした側面から捉えることが可能かもしれない。すなわち、帰還ラオ人がブティック・ホテルを通じて表象しているのは、西洋とアジアの狭間で育まれた彼(女)ら自身のポストコロニアルなアイデンティティや特有のヘリテージ意識である。言い換えれば、世界遺産登録後のルアンパバーンにおいては、こうした観光産業に参入する帰還ラオ人もまた、二次的景観を再生産する主要なアクターとなっているのである。

保存建築を利用した観光関連サービス業は、こ

れまで述べてきたように外部の資本によるものが多いが、自身の民家をゲストハウスにするなど、地元ラオス人による参入も一部ではみられる。ただし、こうした地元住民による宿泊業は廉価な価格帯のゲストハウスのような業態にとどまっているケースが多く、ブティック宿泊施設(boutique accommodation)のような付加価値の高いものにはなっていないのが現状である。経済資本や文化資本の格差によって、ルアンパバーンの宿泊業態は「外部資本＝ブティック・ホテル／地元資本＝ゲストハウス」という二重構造が形成されつつあるといえる。

ただし、こうした二重構造は資本の有無のみに起因する現象ではないであろう。たとえば、ブティック・ホテルに参入する帰還ラオ人の中には、社会主義政権に対する一定の距離感と、内戦前(＝フランス植民地時代)のラオスに対するノスタルジックなまなざしが共有されている。帰還ラオ人の間で特有のヘリテージ意識が共有されているのも、こういった志向と無関係ではあるまい。

他方で、平均的なラオス人の間では、ラオ建築やコロニアル建築等に対する関心はあまり高くなく、むしろ隣国タイの富裕層(Thai nouveau riches)に好まれるコンクリートの現代住宅への憧れの方が強い(Evans, 1998: 123)。

このことから分かるのは、平均的なラオス人の間では、帰還ラオ人と比したときに、フランス植民地時代をノスタルジックな過去として想起する志向は必ずしも強くはないということである。すなわち、経済資本や文化資本の有無だけでなく、帰還ラオ人・地元ラオス人との異なる社会的記憶の位相もまた、各々の宿泊施設の意匠やスタイルの違いを生み出していると考えられる。

これまで述べてきたように、ルアンパバーンの中心部では、保存建築の観光関連施設への転用が進んでいるが、空き家として放置されている物件や、(PSMVに基づけば違法であるが)取り壊され

て更地になっている土地もある。空き家になる理由としては、(1)立地や建物の大きさなどの観点から、観光関連施設への転用が難しい場合、(2)家主がPSMVのガイドラインに基づいた補修に必要なコストを負担ができない場合(老朽化に対処できず、民家としても住み続けることもできない)などが考えられる(Dearborn and Stallmeyer, 2009: 263)。こうした点を踏まえると、世界遺産登録後のルアンパバーンでは、資本の論理にもとづいた保存建築のリノベーション(観光施設への転用)／空き家化という二極化が進んでいるといえる。それゆえ、住居として利用されている保存建築についても、今後老朽化に対処できないような事態が生じれば、空き家化していくことも考えられる。¹³

2. 博物館化と無形文化遺産の衰退

以上、保存建築をリノベーションして観光施設に転用していく動きについて述べてきたが、それだけでは急増する観光客の需要には追いつかない。こうしたリノベーションに加えて、あるいはそれ以上に顕著にみられるのが、既存の非保存建築を取り壊し、新たにホテルやゲストハウスを建設するといった動きである。先述の通り、遺産保護地域内で新規に建造物を建設する場合は、PSMVが指定する建造物類型のいずれかを踏襲しなければならぬ。¹⁴ いわゆる修景と呼ばれる施策を盛り込んだ結果、現在のルアンパバーンでは、新しく建設された観光関連施設が急増している。

ルアンパバーンで新たに建てられたラオ建築について包括的な調査を実施したLeongらによると、その建築資材の利用には一定の傾向がみられるという。まず、屋根材としては伝統的な資材である粘土瓦を使用するケースが増えている。しかしながら、壁などについては、竹やレンガ、モルタル、石膏といった「オーセンティックな」資材は使われず、セメントやコンクリートなどの新しい資材を



地図2 ルアンパバーン中心部の村落区分
 出典 Heritage Information Center (n.d.)

用いることが増えてきているという (Leong et al, 2017: 7-9). なぜこうした傾向が生まれるのかという、そこにはPSMVのルールが一定の影響を及ぼしているという。前述の通り、PSMVでは修景の手法を遺産保全のガイドラインに盛り込んでいるが、その際に重視されるのは建物の視覚的要素である。つまり、粘土瓦のような一目で分かるような資材については厳格な適用が求められるものの、すぐに資材を見分けることのできない壁材などは、塗装で周りの景観と馴染むようにさえていれば、オーセンティックな資材以外の利用も認められているのである (Leong et al, 2017: 9). その結果、全体としては新素材を用いたラオ建築が増えつつあるのである。¹⁵

またコロニアルなイメージをコンセプトにしたブティック・ホテルにおいては、ラオ建築のみならずコロニアル様式の建物を新設するといった状況もみられる。たとえば、ベルリーブ・ブティックホテル (Bell Rive Boutique Hotel) はメコン川沿いに立ち並んだ3棟の建物からなるホテルであり、いずれの建物もコロニアルなスタイルを訴求して



写真5 ベル・リーブ・ブティックホテルの外観(3棟の建物のうち、中央部分のみが保存建築)

いる。しかし、実際にPSMVによって保存建築として指定されているのは、そのうちの1つ (PSMV番号: 287) だけである。この1920年代に建てられたコロニアル様式の住宅以外の2つは、増築によってコロニアル・イメージを新たに再現したものである (写真5)。

本来コロニアル様式とは、単に植民地主義下に西洋がもたらした資材やデザイン等を用いて建てられたという建築的特徴のみならず、「植民地時代に建てられた」という歴史性が遺産としての価



写真6 新たに建設された「コロニアル風」ホテルの外観

値を保証しているはずである。しかし、ルアンパバーンには、「歴史性なきコロニアル様式」という語義矛盾とも言えるようなシミュラークルな建物が混在しているのが現状である(写真6)。さらには、こうした修景が繰り返されることで、一般の観光客にとっては保存建築と非保存建築を見極めること自体が難しいような状態になってしまっている¹⁶のである。

以上のような状況を前にしたとき、真っ先に思い浮かぶのが没場所性(レルフ, 1999)やテーマ化(ブライマン, 2008)といった議論である。たとえば、かつてE.レルフは、ロマン化された過去のイメージに合うように街並みが作り替えられていくことを「博物館化」と呼び、その表層的な景観保全のありようを没場所性と批判した。

博物館化された場所は、ほとんど必ずそれらしく整頓され「変わらぬ昔日の夢のイメー

ジ」に合うように、削除されている。(中略)
 このような場所は、目に見える部分を精細に復元することに力を注いでおり、それが一般の人々が求める歴史的な雰囲気を表してさえいけば、本物の遺物であるか全くの偽物や見かけだけのものであるかは問題ではないようだ(レルフ, 1999: 224)

世界遺産登録後のルアンパバーンにおいては、コロニアル・ノスタルジアというテーマに即した博物館化が進行することで、画一的で表層的な都市景観が再生産されてきたといえる。こうして再編された場所は、テーマ化された場所(ブライマン, 2008)として観光消費の対象となる一方で、地域住民の生活の場としての側面は徐々に失われていく。たとえば、PSMVによって指定された遺産保護区域には、29の村が含まれているが、かつては各村に特産品があり、それらの交換を通じて、1つの社会・経済空間が成り立っていた(Dearborn and Stallmeyer, 2009: 255)。実際、「遺産の家」が観光客用に作成したルアンパバーンのパンフレットにも、こうした特産品を紹介する地図が掲載されている¹⁷。しかし、現在これらの地図を頼りに各村を訪ね歩いて、一部の産品を除けば、村々の特産品を生産している住民に出会うことは稀になりつつある。観光関連サービス業の集積というツーリズム・ジェントリフィケーション(Gottam, 2005)は、地域住民の郊外への移住や生

表 ルアンパバーン中心部の保存建築利用状況(2019年2月)

村(地区)名	Xieng Thong	Phone Heuang	Khili	Vatsene	Nong	Xieng Mouane	Chomkong	Vatthat	Hua Xieng	Phakam	合計
観光関連サービス施設	1	7	5	37	18	45	19	11	10	14	167
民家(職住一致の店舗舎)	8	11	5	7	5	6	9	6	4	15	76
空き家・更地	0	7	3	4	3	0	3	2	2	6	30
公共施設	3	0	0	1	6	1	2	0	0	2	15
不明・その他	0	0	0	9	5	2	8	4	1	5	34
合計	12	25	13	58	37	54	41	23	17	42	322

出典：筆者調査

備考：長屋形式であるショップハウスは、各世帯・店舗ごとに利用状況をカウントしている。

業形態の変容を促し、ルアンパバーンの場所性を支えてきた無形の文化遺産は徐々に失われつつあるのである。¹⁸

V—結び

これまで論じてきたように、ルアンパバーンにおいては、世界遺産登録を契機として、人や資本、イデオロギーなど多種多様なモビリティが生まれ、その帰結としてドラスティックな都市景観の変容がもたらされてきた。その中では、UNESCOとフランスの強い文化的影響力を背景に、フランス人が抱くコロニアル・ノスタルジアがルアンパバーンの強力な「指標」となり、二次的景観(空間)が生産されてきた。しかしながら、こうしたフランス人による「空間と歴史の流用」(cf. Atkinson and Bridge, 2005)の一方で、帰還ラオ人特有のポストコロニアルなヘリテージ意識が表象されたブティック・ホテルなどもまた、二次的景観を生み出す重要なエージェントとなっていることを明らかにしてきた。

さらに、フランス植民地時代を強調した二次的景観の生産は、現行のラオス・ナショナリズムとも共犯関係にある。この点は、以下に述べるように、かつての王宮を国立博物館として流用する革命政府の思惑からも読み解くことができる。

フランス植民地主義下に建てられたコロニアル様式の王宮は、フランス統治下ルアンパバーンのランドマークともいえる存在であった。それはまた、フランスの庇護を受けていた旧王国政府のイデオロギーを表象したのもであった。このようにルアンパバーンの王宮は、コロニアルな記憶が濃密に埋め込まれた場所であるが、新政権樹立後の翌年には、革命勢力によって国立博物館とされている(Evans, 1998: 122)。現在同博物館では、パバーン仏が安置されるなどランサーン王国以来の仏教文化が紹介されている他、内戦前の王室の暮

らしが様々な調度品とともに展示されている。

この革命勢力による王宮の博物館化について、O. タッペは国家による文化遺産の領有であると指摘している(Tappe, 2017: 71-72)。なぜなら、王宮を博物館にすることで、現行のナショナル・ヒストリーに抵触しうる過去が不可視化されていったからである。

この博物館の展示では、内戦前の王室については積極的に語られる一方、内戦中や革命後の王室の存在については一切紹介されていない。周知の通り、最後のラオス国王となったシーサワン・ワッターナーは、激しい内戦を経た革命後、ラオス東部フアパン県の再教育キャンプに収容されたとされている。しかしながら、ラオス国内では、こうした内戦や革命勢力による王室の処遇については不可視化されている。なぜなら、革命政権による国王の処遇が、「無血革命」を自負するラオスのナショナル・ヒストリーに抵触する恐れがあるため、現在でも表立って語られることはないのである。それゆえ、この博物館においても、革命政権による国王の処遇といった「不都合な遺産(inconvenient heritage)」は消去されているのである(Dearborn and Stallmeyer, 2009: 253)。

本来、王国政府の拠点であった王宮が立地しているルアンパバーンは、内戦やその後の王室の処遇などを想起する「記憶の場」でもある。しかしながら、こうした社会的記憶は、ナショナリズムへの抵触を生み出しかねないがゆえに、革命後の国家によって不可視化されてきたのである。それゆえ、フランス植民地時代のノスタルジアを軸とした二次的景観(空間)の再生産は、その後の内戦時代を不可視化するという点において、現行のラオス・ナショナリズムとその思惑が一致する。このように、コロニアル・ノスタルジアに収斂されるルアンパバーンの二次的景観(空間)は、UNESCOやフランス人、帰還ラオ人、さらには革命後の国家も含めた、様々なアクター間の関心

や思惑がそれぞれ部分的に重なり合う中で、生成されてきたものである。¹⁹

以上のように、ルアンパバーンでは、様々なアクターが二次的景観(空間)の生産に関わっているものの、結果として植民地時代の脱政治化されたコロニアル・ノスタルジアに収斂していくような状況がみられる。では、「コロニアル・ノスタルジア」に回収し得ない複雑で多様な記憶は、地域住民によってどのように想起・継承されているのか。こうした「一時的景観(場所)」と「二次的景観(空間)」のせめぎあいについては、本論文では紙幅の都合上十分に論じることができず、今後の課題としたい。²⁰

[付記]

本稿は、平成30年度 獨協大学研究奨励費の成果の一部である。ラオスでの現地調査は、2015年2月および2019年2月に、それぞれ10日間程度行った。

謝辞

大学院の修士課程以来、20年近くに渡り、豊田由貴夫先生には大変お世話になってきました。豊田先生がまだ文学部にいらっしゃった当時、観光学研究科の修士1年目であった千住一さんと私が先生の大学院ゼミを履修したくて、2人で研究室を訪ねて行ったのが最初の出会いです。他の研究科の院生が突然訪ねて行っても、豊田先生は快く履修をお認めくださり、以後長期でフィールドワークに出かけた期間を除けば、ほぼ毎年先生のゼミに出席していたように思えます。「党派性」とは無縁な、豊田先生のお人柄が表れた大学院ゼミのリベラルな雰囲気はとても居心地良く、そこでの様々な出会いや経験は本当に貴重な学びの機会となりました。

先生が観光学部に移籍されてからは、博士論文の副査をお引き受けいただくなど、名実ともに私の研究を支えていただきました。その意味で、豊田先生との出会いがなければ、私自身が研究者として独り立ちすることすら難しかったのではないかと考えています。末筆ではございますが、この場を借りて、改めて御礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

註

- もちろん、特定の歴史や過去が想起され、それが支配的なナラティブとして固定化されていくことに争う動きもみられる。たとえば、戦後の広島において不可視化されてきた朝鮮半島出身者たちが、韓国人慰霊碑を平和記念公園の中に建立するための試行錯誤は、ナショナルな記憶に抗う実践(memory work)といえよう(米山, 2005)。それゆえ、記憶の場を諸アクター間の抗争の場(contested space)として捉える視点は重要であろう。
- フランスの植民地化以前から、ラオス全土で見られた木造の高床式建築。壁材には、木材や格子状に編んだ竹材が用いられる。
- ①の床下部分を、フランスの影響を受けて、煉瓦・モルタル造りにした2階建ての家屋。
- 基本的な造りは①と同じだが、壁の資材にフランスからもたらされた漆喰を使用している家屋。
- ③の床下部分を、煉瓦・モルタル造りにした2階建ての家屋。
- 学校、王宮、警察署、郵便局など、フランス植民地時代に煉瓦やモルタルを使用して建てられたコロニアル様式の公共建築。屋根の造りや形状、ファサードの模様など、ラオスの伝統的な建築上の特徴を取り入れたものも多い。ルアンパバーンでは1909年から建設が開始された。
- 煉瓦やモルタルを使用して建てられたコロニアル建築で、ラオスの伝統的意匠等が随所に用いられている。主に富裕なラオ人やフランス人植民者の住居として使用された。
- 煉瓦造りの長屋形式の建物。通常は2階建てで、1階を店舗、2階を住居とした店舗兼住宅である。1910年頃からベトナム華人が流入することで、増え始めた。
- 7つの建築様式は、大きく分けると、(1)ラオ建築(①~④)、(2)コロニアル建築(⑤~⑥)、(3)華南建築(⑦)の3つに集約できる。
- 2019年現在は、ホテルとしての営業は停止し、ラオス料理やフランス料理を提供するレストランとなっている。
- 本稿では、ラオス国民を指す呼称として「ラオス人」を、ラオ系フランス人などエスニシティとしてのラオを指す場合には「ラオ人」という呼称を使用している。
- その他の建物のPSMV番号は、18, 19, 216(以上、ラオ建築)、217, 315(ショップハウス)である。
- 今回調査を実施した10箇所の村では、2015年の調査時には民家であった保存建築のうち7軒が、2019年の再訪時には空き家もしくは更地となっていた。
- 修景とは、「伝統的なもの以外の建物や施設を、伝統的な景観に調和するように規制を設けること、あるいはデザインすること」を指す(黒田, 2007: 140)。
- 観光施設の新規建設の急増は、建設資材の高騰と不足という状況も引き起こしている。たとえば、ラオ建築に必要な粘度瓦は、かつては地元の職人によって生産されていた。しかし、ディアボンとストールメイヤーによれば、ホテルやゲストハウスの建設ラッシュで供給が追いつかず、隣国タイから輸

- 入する状況が続いているという。こうした建築資材の価格高騰は、本来違法ではあるはずのトタン屋根を使用するといった状態も生んでいる (Dearborn and Stallmyer 2010:97-100)。一般的に、トタン屋根の使用は、廉価な価格帯のゲストハウスや一般住宅で多く見られる。
- 16 保存建築をリノベーションしたホテルの中には、その旨明示したプレートを置くなど、新築ホテルとの差別化を図ろうとするものもある。たとえば、シンガポール人とラオ人夫妻による経営のマイ・ラオ・ホーム (My Lao Home Boutique Hotel) は、4棟の保存建築を所有するプティック・ホテル (PSMV 番号 : 37, 39, 140, 164) だが、それぞれの建物の入り口には、UNESCO によって認定された保存建築であることが記載された看板を設置している。
- 17 「遺産の家」が作成しているパンフレットでは、米麺、ライスクラッカー、手漉き紙、木彫品、金細工、銀細工などの特産品を村名とともに紹介している。
- 18 ルアンパバーンでは、世界遺産登録後に、欧米人の支援や協力などを受けながら、国内の少数民族の手工芸品の生産や技術の伝承をサポートする私設ミュージアムや体験工房、フェアトレード・ショップなどが複数開設され、ルアンパバーンを訪れる観光客の間で人気のスポットとなりつつある。たとえば、TAEC (Traditional Arts and Ethnology Center) などのように、グローバルブランドによる文化遺産の盗用を告発するなど、知的財産権に関する啓蒙活動を行う団体もあり、手工芸品生産の知識や技術などに対する意識向上という点において、一定の社会的効果も生みつつある。このように手工芸品のような観光消費に直接結びつくものについては、世界遺産というブランドによって引き寄せられた知識や資本、人のモビリティを介して逆に活性化されていくといった動きもみられる。
- 19 ただし、ラオス観光全体でみれば、内戦時の記憶は重要な「指標」(MacCannell, 1999) の1つとなっている。たとえば、ラオスの首都ビエンチャン市内で、トリップアドバイザー上最も人気のある観光スポットは、COPE Visitor Center という、内戦時に米軍によって落とされたクラスター爆弾の被害を伝える施設である (2019年12月現在)。また、先史時代の遺跡のあるラオス東部のジャール平原は、今も内戦時に米軍が投下した爆弾によるクレーターが随所に残り、先史時代の遺跡に加えて、内戦時の記憶が重要な指標となっている。ルアンパバーン市の郊外にも、UXO Luang Prabang Center という、ルアンパバーン県内で今も続く不発弾の被害やその対応について紹介する小さなミュージアムがあり、ラオス内戦の重要な記憶の場となっている。しかしながら、コロニアル・ノスタルジアが強調された「UNESCO のサンクチュアリ」(Berliner, 2012) でもある遺産保護区域の中心部には、こうした内戦時の記憶を示すものはほとんどない。ラオス観光で注目される記憶の場は、多くの場合「被害の記憶」が想起される場所であるのに対し、ルアンパバーンの王宮は革命勢力による「加害の歴史」を想起する場所であるからであろう (cf. 米山, 2005)。
- 20 たとえば、実際の生活経験にもとづく個別具体的な「内的ノスタルジア (endo-nostalgia)」と、生活経験に根ざしていない一般化・抽象化された「外的ノスタルジア (exo-nostalgia)」という概念を提示しつつ、ルアンパバーンに関わる諸アクターの多様なノスタルジーを描き出そうとした D. Berliner の論考は、こうした問題意識に近いものである (Berliner, 2012: 781-782)。

文献

- ✧ Atelier de la Péninsule (2004) : *Luang Prabang: An Architectural Journey*, Vientiane: Atelier de la Péninsule Co.Ltd.
- ✧ Atkinson, R and G. Bridge (2005): Introduction. R. Atkinson and G. Bridge eds. *Gentrification in a Global Context: the New Urban Colonialism*, London and New York: Routledge, pp. 1-17.
- ✧ Berliner, D. (2012) : Multiple Nostalgias: the Fabric of Heritage in Luang Prabang (Lao PDR), *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 18: 769-786.
- ✧ ブライマン, A. (2008) : デイズニー化する社会 (能登路雅子監訳), 明石書店, 375p.
- ✧ ブルーナー, エドワード M. (2007) : 観光と文化——旅の民族誌 (安村克己他訳), 学文社, 394p.
- ✧ Bush A, M. Elliot and N. Ray (2010): *Lonely Planet Laos (7th Edition)*, Footscray: Lonely Planet Publications, 376p.
- ✧ Chang T.C. and P. Teo (2009): The Shophouse Hotel: Vernacular Heritage in a Creative City, *Urban Studies*, 46(2): 341-367.
- ✧ Dearborn L. M. and J. C. Stallmyer (2009): Re-visiting Luang Prabang: Transformations under the Influence of World Heritage Designation, *Journal of Tourism and Cultural Change*, 7(4): 247-269.
- ✧ Dearborn L. M. and J. C. Stallmyer (2010): *Inconvenient Heritage: Erasure & Global Tourism in Luang Prabang*, Walnut Creek: Left Coast Press, 168p.
- ✧ Evans, G. (1998): *The Politics of Ritual and Remembrance: Laos Since 1975*, Chaing Mai: Silksworm Books, 216p.
- ✧ フロリダ, R. (2007): クリエイティブ資本論——新たな経済階級の台頭 (井口典夫訳), ダイアモンド社, 484p.
- ✧ Gotham, K. F. (2005): Tourism Gentrification: The Case of New Orleans' Vieux Carre (French Quarter), *Urban Studies* 42(7): 1099-1121.
- ✧ 浜日出夫 (2007) : 歴史と記憶 (長谷川公一他 (編)「社会学」有斐閣), pp. 171-200.
- ✧ Heywood, D. (2006): *Ancient Luang Prabang*, Bangkok: River Books, 213p.
- ✧ Heritage Information Center (n.d.): *Luang Prabang: World Heritage site of UNESCO*, Luang Prabang: Heritage Information Center.
- ✧ 河合洋尚 (2013) : 景観人類学の課題——中国広州における都市環境の表象と再生, 風響社, 390p.
- ✧ King, V. T. (2016): Introduction: World Heritage in Southeast

- Asia: Issues, Prospects and Problems. V.T. King ed. *UNESCO in Southeast Asia: World Heritage Sites in Comparative Perspective*, Copenhagen: NIAS Press, pp.1-34.
- ✦ Kirshenblatt-Gimblett, B. (2006): World Heritage and Cultural Economics. I. Karp et al eds. *Museum Frictions: Public Cultures/Global Transformations*, Durham: Duke University Press, pp.161-202.
- ✦ 黒田乃生 (2007) : 世界遺産 白川郷——視線の先にあるもの, 筑波大学出版会, 249p.
- ✦ La Maison du Patrimoine (2001): *Heritage Preservation and Development Master Plan*, La Maison du Patrimoine.
- ✦ ルフェーブ, H. (2000) : 空間の生産(斎藤日出治訳), 青木書店, 647p.
- ✦ Leong, C. et al. (2016): Analysis of the Changing Landscape of a World Heritage Site: Case of Luang Prabang, Lao PDR, *Sustainability*, 8: 1-23.
- ✦ Leong, C. et al. (2017): Impact of Tourism Growth on the Changing Landscape of a World Heritage Site: Case of Luang Prabang, Lao PDR, *Sustainability*, 9: 1-12.
- ✦ Long, C. (2003): The Persistence of Tradition in Laos. R.G. Knapp ed. *Asia's Old Dwellings: Tradition, Resilience and change*, Oxford and New York: Oxford University Press, pp. 185-202.
- ✦ MacCannell, D. (1999): *The Tourist: A New Theory of the Leisure Class*, Barkley: University of California Press, 231p.
- ✦ 中田友子 (2008) : 世界遺産と文化保存のパラドックス——ラオスのユネスコ世界遺産, ルアンパバーンとワット・プーの事例から, 文化人類学, 73(1): 93-106.
- ✦ ノラ, P. (2002) : 序論——記憶と歴史のはざまに(P. ノラ編「記憶の場——フランス国民意識の文化・社会史 第1巻」谷川稔訳, 岩波書店), pp. 29-56.
- ✦ Peleggi, M. (2005): Consuming Colonial Nostalgia: The Monumentalisation of Historic Hotels in Urban South-East Asia, *Asia Pacific Viewpoint*, 46(3): 255-265.
- ✦ レルフ, E. (1999) : 場所の現象学——没場所性を超えて(高野岳彦他訳), ちくま学芸文庫, 341p.
- ✦ Shaw, W. (2005): Heritage and Gentrification: Remembering 'the Good Old Days ' in Postcolonial Sydney. R. Atkinson and G. Bridge eds. *Gentrification in a Global Context: the New Urban Colonialism*, London and New York: Routledge, pp. 57-71.
- ✦ Souvannavong, Si-Ambhavian, S. (1999): Elites in Exile: The Emergence of a Transnational Lao Culture. G. Evans ed. *Laos: Culture and Society*, Chiang Mai: Silkworm Books, pp. 100-124.
- ✦ 田村克巳 (1998) : 政治の中の文化—文化政策の背景を考える(青木保他編「岩波講座 文化人類学 第13巻 文化という課題」岩波書店), pp. 97-117.
- ✦ Tappe, O. (2017): Shaping the National Topography: The Party-State, National Imageries, and Questions of Political Authority in Laos PDR. Bouté, V. and V. Pholsena eds. *Changing Lives in Laos: Society, Politics, and Culture in a Post-Socialist State*, Singapore: NUS Press, pp. 56-80.
- ✦ Teo, P. and T.C. Chang (2009): Singapore's Postcolonial landscape: Boutique Hotels as Agents. T. Winter et al. eds. *Asia on Tour: Exploring the Rise of Asian Tourism*, London & New York: Routledge, 81-96.
- ✦ トゥアン, Y.(1993) : 空間の経験(山本浩訳), ちくま学芸文庫.
- ✦ UNESCO (2004): *IMPACT: Tourism and Heritage Management in the World Heritage Site Management in the World Heritage Town of Luang Prabang*, Bangkok: UNESCO, 128p.
- ✦ 山田紀彦 (2018) : ラオスの基礎知識, めこん, 328p.
- ✦ 米山リサ (2005) : 広島——記憶のポリティクス(小沢弘明他訳), 岩波書店, 302p.
- ✦ 吉田憲司 (2013): 文化の「肖像」, 岩波書店, 240p.

